

石丸太郎先生の傘寿をお祝いする

西海考古同人会事務局

石丸太郎先生は、大正8（1919）年1月15日に現在の福岡県宗像市でお生まれになり、昭和13年に考古学を志して國學院大學へ入学され、大場磐雄先生に師事されました。学生時代は早稲田大学の直良信夫先生からも教えを受け、藤森栄一氏や杉原莊介氏、江坂輝彌氏とも大いに交友され、時には激論を交わす仲でした。福岡では鏡山猛先生や、『考古学雑誌』誌上に鐘崎貝塚の報告をされた田中幸夫先生に師事され、昭和15年には学史に名高い遠賀川遺跡の調査に参加されました。藤森栄一氏の名著『かもしかみち』におさめられた「遠賀川日記」の中に、このような一節があります。「スコップ組・バケツ組・杭打組・井桁組・木材整理に別れて、猛然最後の突撃、赤間・島田・岡本・岡崎・高山らの猛者が本領発揮、へばっていた乙益も回復」。この「赤間」なる人物こそ、赤間太郎すなわち若き日の石丸太郎先生なのです。

先生は昭和17年に國學院大學を卒業されますが、卒業前年の昭和16年12月に日本は開戦し、先生も翌年の2月1日に召集され、久留米の戦車隊に配属されました。終戦は朝鮮で迎えられ、昭和20年に帰国されています。帰国後上京され、國學院大學に戻られたのですが、きびしい食糧難でやむなく福岡に帰郷され、昭和21年に故郷の県立宗像中学に奉職されたのです。

昭和22年4月に縁あって長崎に移られ、実業家としての道を歩まれることになりました。事業が忙しくなるとともに、考古学からは距離をおかざるをえない状況となられましたが、昭和27年には県の文化財専門委員になられ、昭和37年には五島の遺跡調査の実現に尽力されました。昭和43年ころには、県に対して文化課をつくるように猛烈に陳情され、その甲斐あって昭和46年に教育庁内に文化財課が誕生したのです。その後の長崎県考古学会長としてのご活躍については私たちもよく知るところです。

このように先生の経歴をみますと、戦前から日本考古学の学窓にあり、よき師、よき友に恵まれ、大いに考古学を学ばれたことが理解されます。さらに戦争という不幸な出来事や、経営者としての本業の傍らも、けっして考古学の情熱を失われることなく、本県の考古学や埋蔵文化財行政の基礎をつくられたことがよくわかります。

先生は昨年、数えて八〇歳におなりになり、傘寿という節目を迎えられました。後輩である私たちは、本県の考古学に果たされた先生の功績を再認識するとともに、先生の今後、益々のご長寿とご活躍をお祈り申し上げるものです。